

C O N T E N T S

特集

内科医
が診る

救急疾患, マイナー疾患

はじめに | 困ったときに求められる現場での実践知:

日本の救急医療体制の現状で—— 217

●日比野 将也 藤田医科大学 岡崎医療センター 救急科

1. 熱中症: 重症度にかかわらず, Active Coolingは集学的治療の中心を占める—— 223

●神田 潤 日本医科大学 武蔵小杉病院 救命救急科

2. 創傷処置

① 創傷解剖学・生理学および創傷処置の実践:

治療過程を頭に入れておき, 自分なりの創処置法を確立しよう—— 239

●井上 哲也 練馬光が丘病院 総合救急診療科 救急部門

② 創傷洗浄, 湿潤療法, ドレッシング材, 外用薬, 陰圧閉鎖療法:

傷の治療を促す処置, 遅らせる処置—— 263

●山田 万里央 聖マリアンナ医科大学 救命救急センター

[コラム①] スキン-ケア:

まずは発生自体を認識し, 発生リスクの推定と組織欠損の評価を行おう—— 272

●石川 環 東北福祉大学 健康科学部 保健看護学科

[コラム②] 褥瘡: 保存的局所治療のための外用薬とドレッシング材の使い分け—— 282

●倉繁 祐太 倉繁皮膚科医院

3. 中毒: 原因物質に迫りつつABCを守り, 適切な治療につなぐには—— 291

●千葉 拓世 埼玉医科大学医学部 臨床中毒科

[コラム③] 薬剤の離脱: 生理学と治療のエビデンスの観点から—— 310

●渡邊 匡彦 藤田医科大学病院 救急医学・総合内科学講座

●日比野 将也

4. 低体温: どのように温め, いつ動かすか? 悪化・急変に先回りするには—— 321

●佐藤 信宏 新潟市民病院 救急科

5. 動物咬傷: 創傷処置以降の感染症とenvenomation—— 329

●塚本 英里・山口 裕 沖縄県立中部病院 救急科

●責任編集 日比野 将也
藤田医科大学 岡崎医療センター 救急科
八重樫 牧人
新宿つかめクリニック/医療法人徳洲会

●編集委員 平岡 栄治 (東京ベイ・浦安市川医療センター 総合内科)
八重樫 牧人 (新宿つかめクリニック/医療法人徳洲会)
清田 雅智 (飯塚病院 総合診療部 学術顧問)
石山 貴章 (セントルイス大学 内科 ホスピタリスト部門)
石丸 直人 (愛仁会明石医療センター 総合内科)
濱田 治 (愛仁会井上病院 総合内科)
森川 大樹 (聖マリアンナ医科大学 救急医学)
●顧問 徳田 安春 (臨床研修病院群プロジェクト群馬沖縄)
藤谷 茂樹 (聖マリアンナ医科大学 救急医学)

6. 鼻出血：実践的な止血手技から、背景疾患・最新エビデンスまで——339

- 高橋 優二 重工記念長崎病院 総合内科
- 宗 謙次 北九州総合病院 耳鼻咽喉科

7. 熱傷：急性期においては、局所所見と全身状態をあわせた評価・介入が求められる——351

- 茂野 綾美 東京大学大学院医学系研究科 公共健康医学専攻/JCHO 中京病院 救急科

8. 泌尿器科関連：尿道カテーテルのマネジメントと急性陰嚢症への対応——367

- 福島 俊太郎 亀田総合病院 救命救急センター
- 田邊 翔太 松江赤十字病院 救急部

9. 眼球関連：角結膜異物とアルカリ眼症：

上眼瞼は必ず翻転して確認，アルカリ眼症では即時洗眼——379

- 清水 啓史 たわやま清水眼科/島根大学医学部 眼科学講座

10. 精神疾患：カタトニア，悪性症候群，セロトニン症候群：

診断に至らずとも，支持療法に徹すれば道は拓ける——387

- 久村 正樹 藤田医科大学 岡崎医療センター 救急科

11. 外傷：見逃さない・急変させない！ 股関節と骨盤の骨折に対する診療戦略——405

- 佐藤 史和・鎌口 清満 湘南鎌倉総合病院 救急総合診療科

連載

ホスピタリストとエキスパートで深読み！ 診療を変える最新論文

第4回 | REDUCE-AMI試験——418

- 小野 雅敬 愛仁会明石医療センター 総合内科
- 杉崎 陽一郎 神戸大学医学部附属病院 循環器内科

Clinician Update ——428

- 官澤 洋平 神戸大学医学部附属病院 総合内科
- 石丸 直人 愛仁会明石医療センター 総合内科

書評——309 次号目次——436



編集人——山下 隆久，佐藤 宏之，高橋 諒

レイアウト・表紙デザイン——公和図書デザイン室 (臼井弘志) / イラスト——ソルティフロッグ デザインスタジオ (サトウヒロシ)

注意 本誌に携わった全員が、本誌に示す情報が正確で、実臨床を反映したものとなるよう極力努力した。しかしながら、編著者ならびに出版社は、本誌の情報をを用いた結果生じたいかなる不都合に対しても責任を負うものではない。薬物の使用にあたっては、個々の薬物の添付文書を参照し、適応、用量、付加された注意・警告に関する変化を常に確認されたい。